

連載 プロマネの現場から

第 72 回 トマス・プラッターに学ぶ生涯学習

蒼海憲治 (大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ)

先日、東京オペラシティ・コンサートホールで、ベルリン・フィル八重奏団を聴きました。平日の 19 時開演でしたが、その日はたまたま新宿で打ち合わせだったので、会議終了後、駆けつけることができました。

ベルリン・フィルのオクテット、各曲わずか 5 人から 8 人の編成であるにもかかわらず、一人一人が上手いことあるのでしょうか、ふとフルオーケストラを聴いているような錯覚がしました。

演奏曲の一つに、リヒャルト・シュトラウスの交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」を、ハーゼンエールが八重奏のために編曲した「もう一人のティル・オイレンシュピーゲル」がありました。「西洋音楽史における管弦楽作品の最高傑作」と評された方もいますが、のっけから楽しげな音色が聞こえてきます。いたずらもののティルがあちこちで引き起こす騒動の様子が、目の前で繰り広げられているようです。ところで、このティル・オイレンシュピーゲルの物語は、単に「愉快」な物語ではなく、とても毒のあるものです。16 世紀前半に出版され、著者はブラウンシュバイクの徴税書記ヘルマン・ボーテといわれています。

そのため、主人公のティルは、ブラウンシュバイクに近いクナイトリンゲン村生まれの農民の子という設定です。

このティル、綱渡りをこよなく愛し、いつも綱渡りばかりしています。当時、大道芸人は賤民としてみなされていたため、それを嫌った母親が何度注意してもやめないティルをこらしめるために、綱を切って川に落としてしまいます。これが、ティルが社会からアウトサイダーになってしまう象徴になっています。社会からはみ出したティルは、ドイツ国中を渡り歩きます。各地で、いばりかえった農民、職人の親方や医者、貴族や聖職者、さらには国王に対しても、いたずらを仕掛けます。それも下ネタ満載の悪質ないたずらです。その根っこにあるのは、彼らが持っているちっぽけなプライドや知識をひけらかそうとすることに対する反抗でした。そのため、この物語、ドイツのみならず、周辺の西欧諸国で大受けしました。

物語を読んで印象に残るのは、この全国各地を放浪するティルが、大道芸人、道化だけでなく、手工業職人、パン職人に皮職人、鍛冶屋に画家に医者や教会の寺男など、実に様々な職業に従事することです。

実は、このティルの行動は、当時としては突飛なものではなく、遍歴職人と呼ばれた人々のものでした。

西洋中世にも、実にさまざまな職業があったこと、それを支えた遍歴職人に興味を持ったため、中世ヨーロッパ史の著作を多数書かれている阿部謹也さんの本を手に取りました。

『中世を旅する人びと—ヨーロッパ庶民生活点描』(ちくま学芸文庫)によると、中世の旅人は、現在と異なり、とても危険な目にあうことを覚悟しなければならなかった、といます。道路は整備されず、倒木や土砂崩れ、結氷、洪水などが残り、盗賊に襲われる危険も多かった。道標も不備であり、分かれ道は、そのつど、その人の運命を左右した。そんな中、中世の職人は、遍歴しました。そのため、

《遍歴は十八、九世紀には青少年の人格陶冶の手段とみなされていた。

実際に多くの同職組合規約では職人の遍歴の目的を、

「若く未経験な職人が他国でいわば他人の飯を食い、
新しい技術を習得するため」

としており、親方になる前の修業の旅と位置づけられていた。》

《だから「遍歴こそ職人の大学だ」とすらいわれたのである》といます。

ティルと同時代に生き、実際に遍歴職人の半生を送った人に、トマス・プラッターという人物がいます。阿部謹也さんの訳で『放浪学生プラッターの手記—スイスのルネサンス人』があります。

トマス・プラッターは、1499年、スイスに生まれます。本書は、73歳のトマスが、息子のフェリックスにあてた自伝であり、1572年1月28日から、16日間で書きあげられたものです。トマスは、スイスのヴァリスのヴァスプ教区のグレンヒェン村に生まれます。父は、アントニ・プラッター、母は、アンティリ・ズンメルマツター。トマスの父は、トマスが生まれたあと、まもなく亡くなります。母親がすぐに再婚し、子どもたちを置いて町を出たため、子どもたちは散り散りになり、末っ子だったトマスは伯母にもられます。

自分の食いぶちを稼ぐため、トマスは、6歳で山羊番として働かされます。8歳まで高い山で約80頭の山羊のお守りをしたのですが、この険しい山をかけまわる山羊の番は、6歳の少年にとってとても厳しく、谷底に落ちて死にかけたり、行方不明になった山羊を探して凍えて一晩を明かすなど、何度も死ぬ思いをします。

9歳になった時、学生であった従兄のバウルスと出会い、バウルスについて旅に出ます。このバウルスが、現代から見ると、なんとも不思議な放浪学生というものであり、トマスは、この放浪学生にくっついて旅する「ひよっ子」という存在になります。放浪学生は、10歳前後のひよっ子を親から預かり、学校で教育を受けさせるという約束をして旅に連れて行くのですが、実際には、ひよっ子に乞食をさせ、食べ物を手に入れさせます。しかし、その食べ物は、みな学生に取り上げられてしまうため、トマスらひよっ子はいつもひもじい思いをします。面白いのが、この窮状をみかけたある学校の校長先生が、トマスを生徒にしようとはしますが、トマスはそれを断り、放浪を続けたといいます。

それでも、チューリッヒで貧乏生活を送っていた時、ある家に家庭教師として雇われ、食事をごちそうになるようになります。そして、トマスは、この機会に、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語を同時に学びます。

この時の猛勉強ぶりが「すごい！」の一言です。

「ほとんど眠らずに夜を過ごすことも多く、

睡魔と戦うために大変な苦勞をした。

しばしば冷たい水を口に含み、生の蕪や砂を口に含んで、

万一眠りこんでも砂が口の中でザラザラしてすぐに目が覚めるようにしておいた。

」

こんなトマスのもとへ、ヘブライ語を学びたいという説教師が教えを請いにきます。その人の家で、文法書を読み、ヘブライ語の聖書と対照し、一緒に練習します。このように学び続ける一方、トマスは、ある親方の家に住み込んで職人として働きます。そんなところに、ある日、バーゼルの印刷業者オポリヌスという人が、トマスにヘブライ語を教えてほしいと尋ねてきます。住み込みの職人として、時間が取れないとして断るのですが、オポリヌスの熱心な依頼に根負けし、トマスは教えることを約束します。そのため、夕方の1時間休みをもらうため、親方に給料を下げてもらい認めてもらいます。そして、オポリヌスを教えるため教会に訪ねていくと、そこには18名の学者が勢揃いしていました。びっくり仰天したトマスでしたが、皆に説得され、以後、毎日、ヘブライ語の講義をしました。

さらに、80歳ぐらいの老人が、ヘブライ語を学びたいとやってきたため、教えに行ったという逸話もあります。トマスも偉いのですが、この80歳を過ぎてから新しい言語を学ぼうとする人にも、正直驚きました。

また、これが 16 世紀の話ということもあって二度驚きでした。

その後、トマスは、印刷所を作って経営するかたわら、バーゼルのギムナジウムで、ギリシャ語の教師となります。さらに、皆から推されて、長年にわたって、ギムナジウムの校長を務めることとなります。

手記の最後に、感謝の言葉があります。

「私の出身身分は大変低いにもかかわらず、神は名誉を与えてくださり、この有名な町バーゼルで大学の外のギムナジウムを 31 年間にわたって統率し、そこで多くの高位の人びとの子弟を教育し、多くの博士や学者、所領の領民や所領を支配する貴族の子弟や裁判所の判事や市参事会員となった者たちを育てたのである。」

最後に、冒頭で紹介したベルリン・フィル八重奏団の演奏中に、アクシデントが発生しました。シューベルトの「八重奏曲」の第一楽章の途中で、コンマスの弦が切れしました。コンマスが舞台裏で弦の修理をしている間、演奏は中断。どうなることかと皆、固唾を飲んで見守っていると、登場したコンマスは、日本語で「最初から、やります」といいました。ベルリン・フィルの現在のコンマスは、日本人の榎本大進さんだったことに、その時初めて気づきました。聴衆の多くがその時気づいたようで、笑いとともに割れんばかりの拍手でした。

(参考図書)

阿部謹也・訳『放浪学生プラッターの手記—スイスのルネサンス人』（平凡社）

阿部謹也「中世後期の自伝二著：トマス・プラッターとブルカルト・チンク」『一橋論叢』所収（日本評論社）